創造性と持続可能性
―ホワイトヘッドの文明倫理学―

村　田　康　常

1．成長のイデオロギーと持続可能性のイデオロギー――「共同の善」の探求

アメリカのプロセス神学者ジョン・カブはSustaining the Common Goodの中で、経済的な意味での「成長のイデオロギー（ideology of growth）」と対比しつつ「持続可能性のイデオロギー（ideology of sustainability）」の重要性を指摘している(1)。その議論は、環境問題の深刻化や経済格差の拡大、宗教間の対立や暴力の浸透拡大など、現代の文明社会を破壊しうる脅威となっている諸問題に対して、「共同の善（common good）」という文明の徳を提唱するものである。現代文明社会の諸課題を挙げ、「共同の善」を探求する際に、カブは一貫してプロセス哲学・プロセス神学を洞察と思索の基盤とし、その有効性を訴えてきた。カブは、プロセス哲学・プロセス神学の立場から、文明社会の倫理的理念として「持続可能性のイデオロギー」が有機体論的・宇宙論的な視座から確立されるところに希望を見出している。確かに、現代文明社会の危機と諸課題の要因を近代の「成長のイデオロギー」に求め、これに対してプロセス論的な立場から「持続可能性のイデオロギー」として具体化されうるような「共同の善」を模索するカブらの議論には、鋭い危機意識と正確な社会分析、深い形而上学的洞察に支えられた豊富な含蓄と実行可能なヴィジョンがある。しかも、現代は、カブらの先駆的な議論が指摘した近代世界の「成長のイデオロギー」と新たな「持続可能性のイデオロギー」との二者択一的な対立に多くの論者や実践家が気づいた時代である。現代文明社会は、地球規模での文明と生命の危機に直面して、これら新旧のイデオロギーの対立に引き裂かれつつある。一方ではグローバリズムなどによってますます熾烈になる「成長のイデオロギー」の地球規模の拡大があり、他方ではそこに危機と限界と不公平とを見出した人々が「持続可能性」という言葉の含意する「自立的で公平な、かつ持続可能な経済活動」という論調に殺到しているように見える。そして、「持続可能な成長」を模索する試みが世界中でなされている(2)。カブは徹底している。われわれは「成長のイデオロギー」と「持続可能性のイデオロギー」の二者択一の選択を迫られていると言い(3)、すでに遅すぎるきらいもあると認めつつ、はっきりと後者のうちに可能性を見出すのである。

各分野を横断する「持続可能性」の議論と実践の広まりという状況は、一見、カブらのプロセス哲学・プロセス神学が提唱してきた方向に沿うものに見えるが、現在の持続可能性追求はそれらの形而上学的な洞察を離れて実行可能で実益の見込める経済活動と生活様式の模索に走り、そもそも自然環境とその中で発展してきた文明社会がその全体的な多様性とそのつど実現される調和的統一性との律動の中で何を共同の善とし、どこに向かいつつあるのかを見通すような視座を欠落させつつあるように思える。文明社会の持続可能性を問うとき、われわれは、現代文明社会における自由と責任のあり方、私益を超えた一般的な善の追求と個々の価値の尊重との同時実現、自他の配慮的関係、多様性ないしは多元性と寛容・敵対の問題といった倫理的な課題に直面することになる。これは、文明倫理の課題だといえる。だが、現代社会がその危機意識の中で最も見失いがちなのが、文明社会が実現すべき倫理的な価値とは何なのかという文明倫理学の基礎的な考察である。

そのような状況下で、プロセス神学の立場に立つカブらの議論の原点となったホワイトヘッドの有機体の哲学に立ち返るとき、われわれは、そこに、近代の「成長のイデオロギー」と新たな「持続可能性のイデオロギー」との対立との直中で、前者の抽象化された狭い視座を超え、後者の具体的な問題提起に対してより深く広大なものの見方を提示しうるような視座を見出す。環境と有機体との創造的で調和的な関係性や、世界の多様性を

肯定しつつ個々の出来事の固有性と新しさを評価する視点など、有機体の哲学には、現代文明社会の危機に対処する基本的な概念枠が豊富にある。そして、それらの具体的な視点を支える深い形而上学的な思弁が体系的に展開されている(4)。

2．創造性と調和――有機体の哲学の視座

有機体と環境の創造的な調和、全体の多様性とそのつどの調和的統一とのコントラストという視座は、ホワイトヘッド哲学の「多」と「一」と「創造性」という究極的なカテゴリー（PR 21）に立脚した宇宙論と、「調和の調和」（AI 285）としての平和を追究する文明論とにおいて、体系的に示されている。ここでは、プロセス哲学・プロセス神学の原点であるホワイトヘッドの有機体の哲学に立ち返って、カブらが提起した現代社会の諸問題に対処する根本的な視座を検討したい。

注目すべきは、ホワイトヘッドが、全体と個、多と一の間に「創造性」と「調和」とのコントラストを見出している点である。そこには、流転する創造的世界の中で、安定した秩序はいかにして維持されうるのか、という問いがある。また、実現された秩序の反復的な存続という保守的な趨勢の中で、いかにして創造的な新しさが導入されるか、という問いがある（cf. PR 346-347, AI 286）。杉山聖一郎は「ホワイトヘッドのコスモロジーの視座からみれば、『価値』が人間にだけ付与されるのではなく、自然の中の事象のことごとくにも付与されていることは、明々白々だろう」(5)と述べて、自然全体が生きた有機体として価値を実現するというホワイトヘッド宇宙論の特質を掴みだしている。この宇宙論は、達成された調和を受けつつも既存のものを超え出て新しい価値を実現していく世界の創造的なアクチュアリティと、そのような躍動の中で新たに実現されたものを受けて重厚な豊かさを増す全体の調和とを共に実現する生命の世界、文明社会という、リズミカルな世界のあり方を提示する。ここには、旧来の文明社会を主導してきた「成長のイデオロギー」と新たに模索されている「持続可能性のイデオロギー」との対立に引き裂かれた現代文明社会にとって、示唆に富んだ展望が示されている。それは、社会の文明化の誘引となる理念のありかを「多」と「一」との創造的なリズムや、「創造性」と「調和」のコントラストのうちに見出すような視座である。

既存の秩序の中に新しい要素が現れ、一定の調和を達成した世界に新しい不協和音が響きはじめる（PR 339, AI 281-282）。そうした新奇な要素が、従来の秩序に対して破壊的であり、来るべき文明社会に安全ではなく危険を導入し、ときに破壊的な作用者として作用することがあることをホワイトヘッドは指摘している（SMW 207, AI 7, 258-259, 263-264, 269, 278-279）。ここに、宇宙の創造的前進を中核において宇宙論を展開するホワイトヘッドの有機体の哲学の急所があるといえる。しかし、ホワイトヘッド哲学の主導的な問いは、旧来の安定した秩序のうちに、新しさへの冒険の試みがいかにして導入されるか、その冒険が、硬化した秩序にいかにして新しい生命の息吹きを吹き込むか、そして、そのことによって旧来の秩序が保持してきた諸価値とその実現体系を受け継ぎつついかに新たに活気づいたより多様性のある秩序が現れるか、ということであった。それはまた、宇宙の多様な出来事において実現されるひとつひとつの個別的な価値をいかに評価し、また、これら多様な出来事の全体が相まって実現しつつある価値をいかに評価するか、という問いでもある（SMW 194, 199）。全体と個におけるより高い価値の実現を目指すこの宇宙は、一方でまた、対立し衝突し合う諸価値による破壊や単調な反復において自らの価値を低下させ瓦解していくといった価値低下の要因を含んだ宇宙であり、物的には消耗（wasting）し、身体的経験においては疲労（fatigue）し衰弱（enfeeblement）していく宇宙でもある（RM 159-160, PR 92-93, FR 23-25, 72）。そのような下向きの趨勢に対して、いかに個々の経験の契機が実現する価値の内的強度（intensity）を高めつつ（PR 83）全体の調和的価値をより広くより深く実現していくか、いかにして宇宙の文明化（MT 105）を実現するか、という問いが、有機体の哲学に立脚する文明倫理学の問いである(6)。

3．「生きた社会」としての有機体

この問題について、まず、有機体の哲学の形而上学的宇宙論における環境と有機体の関係性を検

討し、次に、その宇宙論に基づいて人間経験と文明社会の具体的歴史的な諸相を論じた文明論における創造的な冒険と秩序的で美的な調和との統合を検討することにしたい。

創造性を究極の原理とする有機体の哲学にとって、現実の世界とは新しさへの創造的前進のプロセスに他ならない。創造的前進とは、多なるもののただひたすらに生々流転する混沌ではなく（PR 92, 111）、宇宙の多なる要素をそのつどひとつの経験の契機へと統合し新しい調和を実現することでより豊かな多様性を産出するプロセスである。宇宙は、「全体がその諸部分から現出し、諸部分が全体の中に現出する」（AI 48）という創造的なダイナミズムの中で調和的な価値の一定のかたちを実現する。新たなものを創造的に産出する宇宙は、一定の流動性とともに一定の秩序をもっている。宇宙の秩序が創造的であるのは、ただ既存の秩序の反復や状況に応じた再調整によるのではない。また、そのつど生起するひとつの経験の契機は、瞬時に生成しては消滅する孤立した出来事ではない。ホワイトヘッドによれば、アクチュアル・エンティティと名づけられたこれらの個々の経験の契機は、相互の抱握によって結合体（nexus）を形成する（PR 24）。そこに秩序が伴うとき、その結合体は「社会（society）」と呼ばれるが（PR 34）、その最大の要点は、結合体のメンバーである個々のアクチュアル・エンティティの生成消滅を超えて、「社会」が自己を存続させる、つまり自立存続的（self-sustaining）だということである（PR 89）。「社会」の自立存続性とは、巨視的に見ればその結合体が秩序的であること、換言すれば、個々の契機が具現する統合性を超えてそれらを一貫させる共通の秩序があることである。「社会」は、個々の諸アクチュアル・エンティティの主体的諸形式を統合して一定の形式を維持するような上位的な秩序をもつ。すなわち「社会」とは、それを構成する諸アクチュアル・エンティティが、ある「共通要素（common element）」を「共通形式（common form）」（PR 34）ないし「共通性格（common character）」（PR 89）として分有することで自立存続する結合体である。この共通形式をホワイトヘッドは「社会」の「限定特質（defining characteristics）」と呼ぶ（PR 34）。それは、元来、「結合体の各メンバーに例示された単に複合的な永遠的客体にすぎない」（ibid.）が、各々のアクチュアル・エンティティの合生のプロセスにそのつど進入するのではなく、「各メンバーがそれ自身の合生に先立つ結合体の他のメンバーから引き出す」（ibid.）という仕方で「結合体を貫いて継承される」（ibid.）。換言すれば、先立つ結合体の各メンバーから、そのうちに抱握された永遠的客体を新たに生起するメンバーが混成的に抱握することで、その結合体は限定特質を継承する「社会」として存続する。継承された限定特質は、各メンバーが分有する主体的形式としては、全体を統合する個の原理であるが、それとともに、全メンバーに共通の形式として「社会」を形成する秩序という点では、個を統合する全体の原理でもある。ホワイトヘッドは、「有機体とは、価値の一定のかたち（a definite shape of value）を実現するものである」（SMW 194）と述べているが、社会の共通形式である「限定性格」とは、結合体において実現され継承されている「価値の一定のかたち」であるといえる。そこには、実現された価値の一定のかたちを保持しつつ、その価値のかたちを継承することで自らを存続する出来事としようとする有機体の自立存続的なあり方への傾向が現れている。有機体は、このように価値の一定のかたちを実現し、それを継承し保持することで自立存続する「社会」を形成して、それが実現する価値の存続を実現しようとする。これは、有機体の第一の特徴だといえる。

自立している結合体は、それ自身を限定する共通の形式を有するという意味で、ひとつの全体的な秩序をもっている。こうして「社会」は、その限定性格によって、その「社会」の各メンバーにとっての「環境（environment）」（PR 89）となり、各メンバーは限定性格を継承することで、自立存続する「社会」を構成する要素となる。構成要素は、「社会」のうちで価値の一定のかたちを継承あるいは実現する有機体、下位の有機体と呼ぶことができるだろう。一方、より広い視座から見れば、この共通性格をもった全体的な環境としての「社会」は、「より大きな社会（a larger society）」（PR 90）を構成する一要素となりうる。この「より大きな社会」を、その構成要素である各結合体に

とっての外的環境、上位の環境、あるいはより単純に環境と呼ぶことができる。それは、下位の「社会」を構成する諸アクチュアル・エンティティにとって「より広範な環境という背景」（ibid.）であり、それを度外視して「孤立した社会」（ibid.）を考えることはできないとホワイトヘッドは言う。下位の有機体に対して上位の環境となっている「社会」は、より上位の環境に対しては、価値の一定のかたちを実現・継承しつつ存続する有機体である。

こうして、現実世界は、下位の「社会」から上位の「社会」まで、「社会的秩序が重々層をなして背景を形成する」（ibid.）ような「諸社会の階層（hierarchy）」（PR 96）をなして「構造化された社会（structured society）」（PR 99）を構成していく。「構造化された社会は、際立って多様な限定性格を伴った種々の結合体を、パターン化された仕方で織り合わせるところに成立する。」（PR 103）ある階層において存続する「社会」は、上位の「諸社会」に対しては、それらを構成する有機体的な要素であり、下位の「諸社会」に対しては、それらを条件づけ織り合わせる環境である。こうして、「諸社会」は階層構造をなす。これが、価値の一定のかたちを実現して存続しようとする有機体の第二の特徴である。それは、静的な構造体ではない。「複合的で構造化された社会が成長すること（growth）は、自然の中に浸透している一般的な目的（general purpose）を例証している」（PR 100）のであり、それは世界の創造的前進の焦点的な活動である。アクチュアル・エンティティの結合体からより上位の「社会」へと階層的に広がる有機体と環境との連なりは、自然全体におよぶ。「有機体の哲学」においては、宇宙全体が多様な要素によって構成されるひとつの有機体として、そのつどの価値実現の営みを焦点にして創造的に前進する。

複合的に構造化された社会は、常に新しい要素を産出し多様性を増しつつ、それを自らの構造的秩序の構成要素として織り合わせ受容する。この営みのうちに、有機体とその環境との動的な関係性がある。ホワイトヘッドによれば、「すべての社会は環境としてのより広い社会を必要とする」（ibid.）。そこで問題となるのは、構造化された社会が複合性を増していくという自然の趨勢である。環境としての「社会」も個々の有機体もこの趨勢の中で、実現された一定のかたちの価値を「社会」の秩序として継承し存続させるという傾向をもつ。しかしそのように存続するものは、一方で、環境の変化と構成要素の変化にも曝されている。その上位の環境は絶えず新しい諸要素を産出し織り合わせながら、他の諸「社会」と複合的に結びついて広がっていく。また、その下位の有機体的構成要素は、絶えず新しい価値のかたちを実現して、継承された価値の一定のかたちを破っていく創造的活動を展開している。変化する諸要因を統合し、高度の複合性を達成した「構造化された社会」は、「一般に、非常に特殊な環境を必要としているという意味で、『特殊化』されていることになろう」（PR 101）とホワイトヘッドは言い、「『特殊化』の観念は、『複合性』および厳密に限定された『安定性』の観念を含んでいるように思われる」（ibid）と述べる。環境に適応することで安定性を実現しようとする有機体的な「社会」の傾向は、個々のアクチュアル・エンティティの「順応」と類比的である。しかし、問題は、自立存続しつつ安定性を確保することと創造的に前進することとのバランスである。高度に複合的で構造化された社会は、その特殊性ゆえに、その上位の環境と下位の構成要素とに強く依存し、それゆえ、それらの絶えざる変化に曝されている。

構造化された社会が環境の変化に応じて自己を存続させるために採る方法には、主に二通りある。まず、その構成メンバーの細々した多様性を除去し、それらの同質的で斉一的な客体化を促すことで結晶のように頑固な結束を固める方向で秩序の反復を強化することである（PR 101-102）。あるいは、心的極の指向を強くし「環境の新しい要素を、構造化された社会のメンバーに固有の複合的経験と調和させるような主体的形式をもって、明確なフィーリングへと受容すること」（PR 102）により、環境変動を乗り越えて環境の新しさと調和するような新しい自己を実現することである。言い換えると、「社会」の先立つメンバーにおいて実現されている価値の一定のかたちを超えて、新しい価値のかたちをこの存続のうちに吹き込むことで、環境の変化に対応することである。そこに

は、先立つメンバーにおいて例示されている永遠的諸客体と半ば同一で半ば異なる永遠的諸客体の抱握がある。永遠的諸客体を抱握する各メンバーの心的極の働きは、先立つメンバーに例示された永遠的諸客体を反復することを超えて活性化している。

この後者の仕方で自己を存続させる「社会」が、「生きている（living）」（ibid.）と呼ばれる。「『生きている社会』は、何らかの『生きている諸契機』を含む社会」（ibid.）であり、それらの生きた諸契機が心的極を活性化させつつ連なって生起する状態が「全的に生きている（entirely living）」（PR 102）結合体と呼ばれる。

全的に生きていくということは、その結合体が、自己を自己完結的に保持し閉ざすということだけではない。結合体の各構成要素が先立つメンバーにおいて継承されてきた「限定性格」における価値の一定のかたちを反復するだけでなく、その「限定性格」の同一的な継承と分有を破って新たな価値のかたちの実現を目指すことで、その結合体を含む「社会」は「生きている社会」となる。「生きている社会」は、自立存続するために同じ秩序を反復するだけでなく、環境の変化に対応して新しい価値のかたちを導入するような冒険的で創造的な活動を核として含むことで、生き生きと自己を保つことができる。しかし、継承された「限定性格」のすでに成功を収めた価値の一定のかたちを超えて、新たな価値のかたちを実現しようとする創造活動は、その結合体の安定的な存続を破り、破滅の危機に直面するかもしれない。それゆえ、「全的に生きている」結合体は、それを核として含む「生きている社会」が「無機的（inorganic）」（PR 103）な諸結合体をも含み、その社会のうちに「相互作用の複合的な無機的体系」（ibid.）を建設してプロテクトされなければ生存できない。そのとき、その「体系全体の反作用が『全的に生きている』結合体に必須の親密な環境を提供する」（ibid.）。言い換えると、新しい価値のかたちを実現することで全的に生きている結合体は、その価値実現のために、それ自身を守る外殻として無機的秩序を周りに作って、破滅の危険性を回避しようとする。「生きている社会」とは、このようにして「全的に生きている」結合体を核とし、それをプロテクトするという明確な目的をもって無機的な諸結合体を体系化する。ここに、「生きている社会」としての有機体の二つの傾向、すなわち新しい価値のかたちの実現と、既存の秩序の同一的な反復とが結合しているあり方が見出せる。

4．有機体と環境

「生きている社会」という議論は、「有機体の哲学」独自の有機体と環境との関係性への視座を開いている。有機体とは、所与の環境に順応しつつ創造的に自己を実現することで自己の生きる環境を作るもののことである。この活動を通じて、存続する有機体はその環境にますます順応し、また、環境はその有機体の存続に有利な順応可能な環境を実現していく。そこに、ひとつの有機体の自立存続を中心として調和した環境の創造活動がある。また、そのようにしてひとつの有機体を核として創造された環境がもつ体系的で存続的な秩序がある。環境と有機体とは、このようにして互恵的な関係にある。こうした互恵的な関係性を通じての調和的な創造は、ひとつのアクチュアル・エンティティから、「構造化された社会」、そして自然全体にまで当てはまる。「社会」がひとつの生ける有機体でありうるように、自然もまたそれ自体の多様性と統一性とを創造的に実現し展開していく「生ける自然（nature alive）」（MT 148）である。

この「生きている社会」あるいは「生ける自然」を、「多」と「一」とのダイナミックな「創造性」という有機体の哲学の基本的な視座から見ると、そこには、それ自身にとって順応可能な環境を作る個々の有機体の創造活動がある。これは、ひとつひとつの有機体にとって順応可能なかたちで特殊化された調和的環境の創造である。そこには、ひとつの有機体が「生きている社会」として自立的に存続するための外殻的な秩序としての無機的体系によってプロテクトされた「全的に生きている」結合体があり、しかもこの外殻的秩序は、外的な環境からの作用に対する当の有機体の反作用によって、その有機体を中心として外的環境へと拡大していく。「構造化された社会」はそうした個々の有機体の相互的な関係性によって構造化さ

れ複合化していく社会である。そこには、それぞれの有機体とその特殊な環境が実現する多様な秩序がある。各々の秩序のもとに存続する各有機体は、その特殊化された環境を他の有機体と共有するか、その特殊化された環境から他の有機体を排除し環境ごと自己閉鎖的になる必要がある。多様な要素からなる「構造化された社会」には、こうして、相互的な調和あるいは核となる要素と他の諸要素とのコントラストの創造か、諸要素の競争ないしは闘争かが展開される。「構造化された社会」が「全的に生きている」結合体を含む「生きている社会」として有機体的統合と多様性を実現するためには、その構成要素たる下位の諸社会には、競争や闘争を主とする排他性よりも、個々の要素の相互的な調和と配景的なコントラストが必要である。なぜなら、有機体の哲学の立場では、この世界には、本質的に不要な要素はひとつもないのだから。不要なのは、特殊化された環境を固守する個々の有機体の過度の対立闘争による全体的な調和の破壊か、あるいは唯一の調和的関係性が拡大することによって他の多様な要素が排除された環境の実現によって多様性を許容する環境が不寛容な一元的世界へと転落するという事態である。多様な要素からなる「生きている社会」の存続は、それぞれの有機体が創造する順応可能な環境が、他の有機体にとっても順応可能であるような方向で創造されていくこと、すなわち調和的な環境の実現を必要とする。

ホワイトヘッドによれば、「いかなる有機体も、ひとつには激しい変化から身を守るため、またひとつには必要なものを獲得するために、友と共にある環境（environment of friends）を必要としている」(SMW 206)。そもそも環境が自己に対して開かれたものであってこそ、自己は自己を実現しうる。そして、激しい環境変動と生存競争の中で自己創造的に存続する「全的に生きている」結合体は、その環境に対して自己を閉ざしつつ存続するのではなく、むしろ環境に対して自己を開いていく。言い換えると、成功する有機体は、その環境を作り変える。しかも、その環境を利己的に作り変えて他に対して敵対的な条件を作っていくのではなく、自己と他者とが「友（friends)」として共存しうるような複合的で調和的な環境を作る。

5．自己自身・他者・全体との関係性における価値実現

ホワイトヘッドの有機体の哲学の優れた点は、構造と変動という外的で巨視的な視点から人間や社会を見るだけでなく、個々の出来事をその主体的経験において微視的に内的な視座から見る視点をも備えているというところにある。人間はひとつの「生きている社会」として複合性を増し環境との動的関係の中で自己を創造的に存続させる有機体であるが、また、同時に、それ自身の直接的な経験を享受する主体でもある。この際立った主体性あるいは自己ということが、人間の特徴である。

人間は自己をまさに個別的な自己として確立するが、その自己実現は、活発な心的極の働きを特徴としてそれ自身の主体的な目的を目ざす目的的な活動であるとともに、与えられた環境の中でその環境の諸要因を受容することによってはじめて成り立つ因果的な活動でもある。そのつどの経験の主体は、現実世界の中で、また現実世界から、新たな契機として生起していくのである。自己を実現した経験の主体は、その環境を構成する一要素として自らを客体化して与えていく。すなわち、人間は、与えられた環境の中で主体的に自己を確立しつつ、確立された個別的自己を客体化して環境へと与えていく。生きるための世界としての環境を与えられ、生きている自己をその環境の構成要素として客体化し与え返していく営みのうちに、人間経験がある。そしてその営みは、微視的には、「ひとつの今、ひとつのここ」(SMW 69)での私として生起する個々のアクチュアル・エンティティのうちに見られるとともに、巨視的には、「全的に生きている」結合体を核とする「生きている社会」を含んだあらゆる「構造化された社会」に見られるものである。ホワイトヘッドはそれを「文明化された社会（civilized society)」と呼ぶ。そこには、有機体としての生の営みが、全体にも細部にも見出される。生きた有機体のこの創造的な自己実現は、そのつどの関係性において成立していく。有機体を生かすこの関係性の全体は、当の有機体にとって生きるための環境である

とともに、それ自体が当の有機体を含むあらゆる出来事によって内的に構成されることによって生かされている巨大な有機体、すなわち「生ける自然（nature alive）」（MT 148）である。それは、その構成要素によって生かされている全体であるだけでなく、それ自身が創造的に前進することによって自ら生きる有機体でもある。そこに、宇宙の文明化という巨大な創造的前進の営みがある（MT 105）。宇宙はこうしてその細部から全体に至るまで、生きている有機体、自己を実現する有機体、他を生かす有機体、他とともに生きる有機体に満ちている。そこに、そのつどの調和を実現しつつも自己を超え出ていく創造性の躍動がある。「すべてのものはそれ自身のため、他者のため、全体のために何らかの価値を有する」（MT. 111）という「まさに宇宙の本質であるような価値の経験」（ibid.）こそ、思弁哲学が常に立ち返る出立点である。

こうした有機体の哲学の視座から見れば、有機体の自己実現は、当の個別的自己とそれ自身との関係性、他者との関係性、そして全体との関係性の 3 つの相においてなされる。有機体と環境との関係性は、少なくともこれら 3 つの相に照らして考察されねばならない。これら 3 つの相から有機体と環境との関係性を見ることは、「成長のイデオロギー」の限界に直面し、「持続可能性のイデオロギー」の可能性を探る現代社会に新たな視座を与える。有機体の哲学は、ある基本的なコントラストをもって、「生ける自然」としての創造的で秩序ある宇宙を考察する。すなわち、創造性がもつ新しさへの冒険と、秩序がもつ調和と安定性である。

このコントラストにおいて、有機体と環境との関係性を上記の 3 つの相から考えれば、個々の有機体を固有の特殊性をもった自己たらしめているのは、まず、自己にむけて特定の環境が与えられているという初期的な状況があるという事実性である。それは、特定の他者を含み歴史的な経緯をもって与えられた環境であり、それが与えられるということは、その環境そのものがそれ自身を新たに生起しつつある有機体に向けて開いているということである。次に、そのように自己に向けて開かれた環境の中で、有機体は、まさにその個別的で唯一無比の自己へと生成していく。そこには、開かれた与件的な環境から個別的な自己自身へと自己完結的に閉じていくという自己完成へのプロセスがある。これがいわゆる合生のプロセスである。しかし、こうした個別的自己の自己完成ないしは自己実現という、開かれた環境から自己自身へと閉じていくプロセスは、所与の現実世界全体を自己のうちに引き受けてなされる価値実現という意味では、開かれた全体を具現する有限で閉じた個の生成である。しかも、その完結し閉じた自己は、脱自的にそれ自身を客体化し環境へと与え返す。こうして、生成し自己を完成させた個は、「全的に生きている」結合体を構成し、あるいは「生きている社会」や「生ける自然」を構成する新たな構成要素として、自己を環境へと開いていき、その環境を自己が存続するための特殊な環境へと作り変えていく。そこには、閉じた自己が環境へと自己贈与的、貢献的に開かれていくというプロセスがある。これが、合生のプロセスに続く移行のプロセスであり、この両プロセスの律動的な展開の中で、有機体と環境の関係性は、現実世界を創造的に前進させるような躍動性をもつ。所与の環境には一定の秩序ないしは調和と一定の不調和があるが、全体と個、環境と有機体との創造的な関係性は、既存の環境的秩序の中に新しい調和的要素ないしは新しい独自で異質な要素をもたらしていく。環境世界における個別的自己の生成という人間のあり方に照らしていえば、そこには、常に、新たで独自な個性をもった自己の生成があるとともに、その個別的な独自性は自己完結的に閉じるばかりでなく、自己の主体的な直接性を超え出て環境世界に向けて開かれ、環境世界を構成する新たな要素として与えられていく。個別的自己の生成のプロセスは開かれた環境から完結した独自の自己へと閉じていくプロセスだが、このプロセスには、完結した自己が後続する環境世界に、「全的に生きている」結合体を含む生きた「社会」に、ひいては「生ける自然」全体に、脱自的に自己を投げ出して永続的な影響効果を与え続けるというプロセスが伴う。アクチュアル・エンティティが主体にして自己超越体であるといわれるゆえんである。別の用語を使えば、世界の多なる要素から新たな一つの要素が生成する「合生」

のプロセスに継いで、生成した一が多に加えられて全体が様態化される「移行」のプロセスがある。この両プロセスの交互連関において、一切が生かされつつ自ら生き、そして他を生かす。一切が関係し合い、その関係性の中で一切が創造的に自己を実現しつつ、他の自己実現のための環境を作る。このことが自覚されたとき、人間の自然環境に対する責任という環境倫理の課題の宇宙論的・存在論的な意味が自覚されるだろう。

6．宇宙の文明化

こうした議論は、自己自身への生成の自由と、環境世界に対する責任という倫理的課題を照射する。ホワイトヘッドの文明論では、この自由と責任という問題が、文明化しつつある社会における冒険と調和という視座から捉え直されている。ホワイトヘッド文明論は、新しい価値実現の冒険がいかにして既存の秩序の閉塞的で反復的な存続が引き起こす価値低下を打開する新たな展望を開くかという問題と、この新しい冒険的な要素が破壊や対立ではなく、いかにして新たな調和的秩序を文明社会にもたらすか、という問題とをめぐって展開されているといえる。既存のものを超えて新しさを目ざす生命の躍動をいかにして存続する秩序のうちに受肉させ、環境を創造する文明化された存在者の世界理解の形式を刷新していくか、また、その際に、新しさが既存の秩序に対して破壊的なものとならず創造的な要素として機能するにはどのような文明の形式が必要なのかを考察したのが、ホワイトヘッドの文明論である。

有機体の哲学に立脚した文明倫理学にとって、最大の問題は、「全的に生きている」結合体を含む「生きている社会」の複合的な構造化によって成立する文明社会が、そして、それらを含む「生ける自然」が、常に調和的な創造性を具現しているわけではないということである。そこには、その秩序を存続させようとする有機体に対して絶えず変化する環境の流動性があり、また、自立しようとする有機体同士の葛藤と対立がある。一方には、安定した秩序を維持しようとして他に対して閉鎖的で自己に対しては反復的になっていくことで生き生きとした活力を喪失して頽落していく有機体があり、また、他方には、新しい要因を実現しようと創造的に冒険する有機体が、既存の秩序に対して破壊的な作用をするという傾向もある。これらは、生命の根本問題であり、また、文明化された社会の根本問題である。最後に考察したいのは、この問題に対する有機体の哲学の思弁である。

まず、われわれは、従来の社会的秩序や一般的な理解の枠組みに対する新しい展望の導入という、冒険的で、ときに破壊的な作用を起こす有機体の生の営みがもつ倫理的な意味について考えたい。そこには、旧来の秩序を保持する保守的な立場から見れば、破壊的な悪がある。しかし、それはまた、新しさを実現しようとする生命の躍動であり、新しさへの創造的前進という宇宙の衝動の具体的な活動でもある。そこには、新しい理想の探求という意味での善の実現の努力がある。「生きること（to live）」、「よく生きること（to live wll）」だけが、生命が理性を備えるに至った意味ではない。「よりよく生きること（to live better）」を目指す冒険的な探求こそ、理性の真の機能である（FR 5）。「それ〔理性〕は、それ自体、よい生（good life）からよりよい生（better life）に向かう衝動（urge）を成り立たせている。」（FR 38）よりよい生を目ざすことこそ、「生命の技芸（*art of life*）」（FR 4）である。そこに、所与の環境によって限定されつつも、その限定を超え出て新しさを追求し自己存立の核としてその理想を具現しようとする自由がある。このとき、善とは、永遠不滅のイデアではなく、すでに実現された「よく生きている」有機体のよさでもない。善とは、よりよく生きるための「生命の技芸」のうちに、またよりよい価値を実現しようとする文明化の努力のうちに、常に途上的で相対的な形式として提示され、受け容れてられていくものである。したがって、ときとしてそれは非常に破壊的なものとして、つまり悪として実現されるかもしれない。そのような危険性を含んでいることが、よりよく生きるという生き方を目指して既存の秩序を超え出ていく有機体の冒険である。このように定着した秩序のうちに不協和を奏でる要素を導入しようとする冒険を受け止め、世界全体の新しさへの創造的前進の焦点として受容するという寛容さが、「世界の善性」（PR 339）である[7]。こうした受容

的な場がなければ、冒険的な探求が招来する文明社会の新しい理想は、破壊的な悪になってしまうであろう。

そのような冒険的な前進の試みと安定した秩序との対立をコントラストへと転換し和解させるような、有機体の哲学のヴィジョンとはどのようなものか。それは、「友と共にあるという環境」（SMW 206）の友愛、あるいは他によって生かされつつ生き、そして他を生かそうと自己を超え出る有機体の生成消滅の営みがもつ配慮と寛容、あるいはそうした流転する世界の直中で実現された調和的価値を失わせまいとする「優しい配慮」（PR 346）、といった言葉で暗示されてきたヴィジョンである。ホワイトヘッドは、共に生き、他を生かすような配慮を「愛」（AI 284, 289）と呼び、一切を生かすような宇宙の衝動を「〈神的エロース〉」（AI 277）と呼び、そして、それらによって招来される不協和を超えて創造的な調和が実現されていくことを「〈平和〉（Peace）」（AI 285）と呼ぶ。宇宙は物的には疲労し消耗し衰弱していくが、そういった下向きの趨勢とともに、「スピリチュアルに上昇していく」（RM 160）という「上向きの趨勢」（FR 24）もある。ホワイトヘッドが示そうとした〈平和〉とは、調和した秩序の存続という、無時間的な理想の境地ではない。それは、下向きの趨勢と不可分の上向きの趨勢の中で、より広大な視座へとみずからを超え出ていこうとする文明社会において「『自我』が消えて、最も広いもの、すなわち、個々の関心がより広い様々に整序されたものへと転移されているような広さへの、自己制御」（AI 285）を実現することである。端的に言って、〈平和〉とは、「より広大な一般性へ」（PR 15）と向かう文明化のヴィジョンである[8]。ホワイトヘッドは「文明化された宇宙」という言葉を用いている。山本誠作によれば「ホワイトヘッドは、世界の文明化を話題にしている」[9]のである。文明化のプロセスは、人間の社会を超えて、「生ける自然」の全体における価値実現へと広がる。創造的に前進する宇宙における価値実現のプロセスが、宇宙の文明化のプロセスである。その焦点となるのが、人間の社会の文明化であり、個々の文明化された人間の経験における価値の一定のかたちの実現である。文明化とは、消耗していく物的世界の下向きの趨勢と精神的に上昇していく上向きの趨勢の中で、有機体の実現する価値のかたちがより広大な一般性を実現し、そのことを通じて各有機体がそれぞれの活動のなかでよりよき生を実現しようとする調和的な創造の営みである。そのようにして、文明化する宇宙に全体と個との調和的で創造的な関係を成立させるよう、一般的な展望と個別の事柄への愛着とを和解させることが、文明化のプロセスにおける「共同の善」のあり方だといえる。

7．希薄な気圏からの着陸

ホワイトヘッドの文明論は、有機体の哲学の宇宙論を基礎として展開される。その宇宙論は思弁哲学の方法によって「より広大な一般性へと向かう航海」（PR 15）である。そのとき、「哲学の有益な機能は、文明化された思考の最も一般的な体系化を推進することである」（PR 17）。この推進の方法、すなわち思弁哲学における「発見の方法」をホワイトヘッドは「飛行機の飛行」に喩える。有機体の哲学の宇宙論は、直接的で特殊な観察という大地から離陸して「想像的な一般化という希薄な気圏を飛行する」（PR 5）という野心的な想像力の冒険であり、そこで思弁哲学は最高度に一般的で合理的な諸観念の整合的な構図を体系化しようと試みる。「しかし構図は、特殊な状況に適用可能な真の命題が、そこから導き出されうるひとつの母式（matrix）である。」（PR 8）有機体の哲学がわれわれに開いた課題は、この適用可能性に関する「プラグマティックなテスト」（PR 13）であり、希薄な気圏からの「着陸」である。それは、「実践（practice）」（ibid.）の問題であり、そこまで達することが思弁哲学の現代社会におけるアクチュアリティの重要な一側面である。

文明社会における「共同の善」をプロセス哲学に基づいて追究するわれわれの課題は、この着陸にある。ホワイトヘッドは、その有機体の哲学において、「一般的な善（general good）」（PR 15, 105）に言及しているが、そうした議論を含む思弁哲学の一般的な諸観念の体系的構図という飛行機を着陸させるときの機体の重心をどこに置くかが問題である。ここでは、着陸時に細心の注意を払うべき重心の位置を、有機体の哲学の「創造性」

と「調和」のコントラストのうちに求めたい。

着陸姿勢をとる際に留意すべき3つの問題がある。まず、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論の構図は、その野心的な想像力の冒険的精神とともに、その有限性と不完全性を自覚しつつ提示されている。その形而上学体系あくまで「暫定的」であり、「究極的な一般性の、試論的な定式化」(PR 8)である。その暫定性のゆえに、実在の一般的定式化の試みは、プラグマティックなテストを常に要求する。第二の問題は、このテストの際に、「哲学に古臭い教条主義的なテストを押し付ける」(PR 14)という傾向が文明社会に見られるということである。そもそも、形而上学体系全体が論理学的に真か偽かを問われれば、それはその不完全性と離陸地点での「洞察の弱さと言語の欠陥」(PR 4)ゆえに、偽だと答えなければならない(PR 8)。しかし、合理的一般性の想像的な探求が「無益(uselessness)」であり「不毛な(barren)」議論だという非難は的を外している。なぜなら、「諸事実が結合されているように見える」(PR 6)という「直接的なむき出しの事実」(PR 14)こそ直接経験の事柄であり、ひとつの事実を理解するためには、それを「それ〔ひとつの事実〕とのある体系的関係をもった世界における一事項として、形而上学的に解釈すること」(ibid.)が求められるからである。こうして、第三の問題は、そもそもどの直接的な経験の地盤に着陸しようとも、そこは整備された滑走路ではなく、諸解釈と諸理解が錯綜する見通しの悪い霧がかかった新しい地平だということである。「諸事実に関する体系化されるに至っていない報告は、それ自身、大いに議論の的であり、体系は、明白に不十全である」(PR 343)という状況で、形而上学体系は実践へと着陸する。

議論の的となっているのは、文明化された社会における「成長のイデオロギー」であり、その破綻に際して「今日の話題は一般に『持続可能な発展』である」[10]。成長のイデオロギーを支えた経済理論の核となっているのは、アダム・スミス以来の「経済人(homo economicus)」という抽象化された人間観であり、その抽象の上に展開される市場理論およびそこでの経済的成功という尺度である。そこに、「具体性を置き違える誤謬」があるとカブらは指摘する[11]。抽象化された理論の上に展開される経済活動は、「地(land)」を物的資源と見なして人間中心主義に陥るが、「経済人」を核にしたアカデミックな理論ではその陥穽が視野に入らない。また、経済的成功の尺度からは、貧困層や第三世界の生活が視野からこぼれることになる。今、こうした「成長のイデオロギー」は、環境問題と経済格差の両面から、その限界と破綻を突きつけられている。カブらは、地球規模で拡大していく経済活動とそのアカデミックな理論を支配する「成長のイデオロギー」に対して説得力のあるヴィジョン、すなわち地域で自給自足して環境負荷をなくし経済格差をなくすような諸社会のヴィジョンを描くが、その諸社会はばらばらの単位ではなく、共有する「共同の善」の中で有機的に結びついて「諸共同体の諸共同体」[12]をなす。「共同の善」は、「具体性を置き違える誤謬」を自覚し、人間中心主義を脱して「生きているシステム」としての「生命圏」[13]のうちに生命多様性を見出し、多様な生きている諸社会と生きている諸事物の自立存続に、価値と必要性を認める。

こうしたヴィジョンのうちに、われわれは、「創造性」と「調和」のコントラストに重心を置いて解釈されたホワイトヘッド形而上学体系を着陸させたい。有機体の哲学の宇宙論に基づく文明論を、「全的に生きている」諸結合体から「生ける自然」として文明化する宇宙まで論究する哲学、文明化する生命の哲学と解釈し、経済的成長のドグマに代わって持続可能な社会における「上向きの趨勢(upward trend)」(FR 24)を見出したい。このとき、ホワイトヘッド自身が、その形而上学的宇宙論を文明社会の論究へと着陸させた議論が大いに参考になる。ホワイトヘッドは、「われわれの現今の世紀を構成する諸社会の階層(hierarchy)」について論究するとき、「今、形而上学的一般性を捨てつつある」と言い、「われわれの一般的な宇宙論と合致するがそれによって余儀なくされてはいない解明のより特殊な可能性を検討しよう」と言う(PR 96)。それが、「全的に生きている」結合体を考究する議論である。ここでは、持続可能な文明社会が閉じた社会ではなく、自立存続の下向きの趨勢の中で頽落し自己反復的に硬化する諸結合体の中に、「全的に生きている」

結合体を核として上向きの趨勢の中で価値を実現する創造的前進の営みが、より広い調和を目指して開かれていくことを示した。新しい価値のかたちを実現しようとする「全的に生きている」結合体は、その創造的で冒険的な活動のゆえに、それ自身もその環境も破壊して、存続できなくなる可能性がある。それゆえ、この結合体は、それ自身の存続を担保するような無機的な体系をそれ自身の周囲に形成する。そこに、秩序の反復によってプロテクトされた新しさへの創造的な活動が展開する。しかし、この無機的な体系そのものも、周囲のより上位の「社会」との調和においてこそ、存続しうる。そして、やがてその無機的体系の外殻も、周囲の環境の変化に対応しきれず、変革されるべきときがくる。そのとき、有機体は、それ自身の核となる「全的に生きている」結合体やその外殻としての無機的な秩序の体系だけでなく、それ自身の環境である上位の諸「社会」をも変革しつつ、新しい生命のかたちを実現しようとする。こうして、調和の中での創造性と、創造性によって新たに実現される調和とのコントラストの中で、有機体の営みが展開するのであり、環境世界の調和と創造性が実現するのである。

ひとまず、ここでの議論の着地点をこのコントラストのうちに見出したい。文明社会の倫理として「共同の善」を求めるとき、われわれは、創造性と調和とのコントラストにおいて互恵的に価値を実現する有機体とその環境との関係性というホワイトヘッドの洞察のうちに、この「共同の善」の一定のかたちを見出した。それは、持続可能性と成長との二者択一ではなく、創造性によって常に調和が新鮮さを保ち、調和によって創造性が常に安定した地盤を保つという創造性と調和とのコントラストにおける有機体と環境のあり方に根ざした、共生の道を示すものである。

8．おわりに

近代の「成長のイデオロギー」に代わって提唱される「持続可能性のイデオロギー」に対して、ここでは、ホワイトヘッドの有機体の哲学が示した創造性と調和的秩序のコントラストの実現という観点こそ、今後の文明社会が正面から取り組むべき課題であることを提唱したい。その取り組みの基礎となる深い形而上学的宇宙論と文明論は、すでに、有機体の哲学によって示されている。その洞察は、端的に言って、環境とは、下位にある有機体を生かす上位の有機体であり、また、上位にある有機体を生かす下位の有機体でもありうるということ、そして有機体とは、それ自身のために生きるだけでなく、他を生かし、全体を生かすという仕方ではじめて「全的に生きている」と言えるのだという、単純だが深みのある洞察である。その洞察の基礎にあるのは、こうして生かされつつ生き、そして他を生かすという有機体の営みの調和的で時に冒険的な関係性を通じて働いている「創造性」こそが、生命と文明社会と自然とを含むこの宇宙の「究極的な原理」（PR 21）であるという形而上学的な直観である。

（この論文は、日本ホワイトヘッド･プロセス学会30周年記念全国大会「ホワイトヘッドと現代の倫理的課題―公共善と持続可能性―」（青森公立大学）において2008年10月26日に口頭発表された原稿「創造性と持続可能性―ホワイトヘッドの文明倫理学―」を大幅に加筆訂正したものである。）

凡例

ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead）の著作は、引用に際して以下のように略記し、該当するページ数を付記する。なお、引用文中の〈　〉は大文字で表記された箇所を、傍点はイタリックで表記された箇所を、〔　〕は筆者による補足を示す。

SMW: Science and the Modern World. 1925. New York: Free Press, 1967.

RM: Religion in the Making. 1926. New York: Fordham University Press, 1996.

PR: Process and Reality. 1929. Corrected Edition. New York: Free Press, 1978.

FR: The Function of Reason. 1929. Boston: Beacon Press, 1958.

AI: Adventures of Ideas. 1933. New York: Free Press, 1967.

MT: Modes of Thought. 1938. New York: Free Press, 1968.

注

(1) J. B. Cobb, Jr., *Sustaining the Common Good: A Christian Perspective on the Global Economy*, The Pilgrim Press, 1994, p. 47.

(2) 「持続可能な発展(sustainable development)」という語は「持続可能な開発」とも訳され、1980年に国際自然保護連盟（IUCN）や国連環境計画（UNEP）などが取りまとめた「世界保全戦略」で提唱された。1984年に国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会（WCED: ブルントラント委員会）」が1987年に出した最終報告書*Our Common Future*（『地球の未来を守るために』）では、「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現代世代のニーズを満たす」という「持続可能な開発」が示された。1992年の「環境と開発に関する国連会議（UNCED: 地球サミット）」で採択された「環境と開発に関するリオ・デ・ジャネイロ宣言」や「アジェンダ21」では、「持続可能な開発」が中心概念として具体化され、国連に「持続可能な開発委員会(CSD)」が設置されるなど、今日の地球環境問題に対する世界的な取り組みを主導する概念となった。

(3) Cobb, op.cit., pp.47-48.

(4) ホワイトヘッド哲学が文明社会の倫理的課題に対して積極的な応答をなしうるとする立場は、上述のカブらアメリカのプロセス神学者だけでなく、日本の研究者によっても探求されている。例えば、田中裕「近代文明の生態学的危機と有機体の哲学」（プロセス思想シンポジウム編『ホワイトヘッドと文明論』行路社、1995年、７-31ページ）、間瀬啓允『エコロジーと宗教』（岩波書店、1996年）、田中裕『ホワイトヘッド：有機体の哲学』（講談社、1998年）、村田晴夫「意味の文明論的階層性と現代文明」（『武蔵大学論集』第48巻第２号、2000年、121-138ページ）、林貴啓「時間的倫理の地平―プロセス哲学的アプローチ」（日本ホワイトヘッド・プロセス学会『プロセス思想』第13号、2008年、115-130ページ）等を参照。

(5) 杉山聖一郎「環境問題と自然観の転換」、プロセス研究シンポジウム編『環境倫理の課題：新たなコスモロジーの探求』行路社、1992年、51ページ。

(6) 創造的に前進する世界は物的に消耗しつつ精神的に上昇するというホワイトヘッドの議論には、ベルクソン哲学の影響が色濃く見られる。ホワイトヘッド自身、こうした「前進と後戻りという二重の傾向」(FR 29)について議論しながら「私たちは誰しもベルクソンのエラン・ヴィタールや、それの物質への後戻りといった学説を想起する」(ibid.)と述べている。ベルクソンとホワイトヘッドの影響関係については稿を改めて論じたい。

(7) 拙稿「逆説としての世界の善性―ホワイトヘッド宇宙論と文明論の接点―」（『キリスト教学』46号、立教大学キリスト教学会、2004年、69-85ページ）参照。

(8) 拙稿「ホワイトヘッドの平和論―有機体の哲学が希求するもの―」（『プロセス思想』第13号、日本ホワイトヘッド・プロセス学会、2008年、67-87ページ）参照。

(9) 山本誠作「ホワイトヘッドの文明論と科学的唯物論」、プロセス研究シンポジウム編『ホワイトヘッドと文明論』行路社、1995年、163ページ。

(10) J. B. Cobb, Jr., *Sustainability: Economics, Ecology, and Justice*, Wipf and Stock Publishers, 1992, p.86.

(11) H. E. Daly and J. B. Cobb, Jr., *For the Common Good: Redirecting the Economy toward Community, the Environment, and a Sustainable Future*, second edition, Beacon Press, 1994(1989), Part One.

(12) Daly and Cobb, *op.cit.*, p. 176.

(13) Daly and Cobb, *op.cit.*, p. 201.

Creativity and Sustainability: Ethics of Civilization in Process Thought

Murata, Yasuto*

Whitehead's idea of "process" expresses the creative and harmonic relations between organisms and their environments. His philosophy suggests a reasonable and practicable way of thinking based on its deep metaphysical cosmology to our civilized society, which is now faced on the crisis of losing of its creative harmony with its environment. In its crisis, civilized society seeks for a conciliating point of the conflict between the ideology of growth and that of sustainability. His philosophy nevertheless shows another contrast between the ideal of creativity and that of harmony. From this point of view, the civilized society must hold a twofold question: how does it sustain its stabilized order in the midst of fluency and changing of the creative world, and how does it introduce a novel creative factor in the trend to conserve its fixed and limited traditional order? In this paper, I try to show that what our civilized society must realize is the contrast between creativity and harmony, by which it actualizes itself to be a "living society" as a focal point of the creative advance of the world.

有機体と環境との創造的で調和的な関係性をプロセスとして思索する形而上学的思弁こそ、ホワイトヘッド哲学の中心的な課題である。そこには、流転する創造的世界の中で安定した秩序はいかにして維持されうるかという問いと、実現された秩序の反復的な存続という保守的な趨勢の中でいかにして創造的な新しさが導入されるかという問いがある。そこで探求されるのは、達成された調和を受けつつも既存のものを超え出て新しい価値を実現する創造的なアクチュアリティと、その躍動の中で新たに実現されたものを受けて重厚な豊かさを増す全体の調和という実在のあり方である。ここには、J.B.カブが危惧した「成長のイデオロギー」のグローバルな展開と、新たに提唱されている「持続可能性のイデオロギー」との対立を超え、両者を包摂し現代文明社会を教導する文明の倫理的原理となるものが示されている。この論文では、ホワイトヘッドの有機体の哲学が示した創造性と調和的秩序のコントラストという有機体のあり方が、文明社会において実現されなければならないことを提唱し、そのことによって文明社会は一つの有機体として、すなわち「生きている社会」として、創造的に前進する世界における価値実現の焦点となることを示した。

キーワード：文明論，環境倫理，持続可能性，有機体，ホワイトヘッド

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*